

都道府県別賞一等

生命保険と想いやり

三重県 名張市立桔梗が丘中学校 三学年

久志本 若葉

生命保険と聞いて、私の家族には関係のないものだと思った。私の母はシングルマザーで、裕福な家庭ではないからだ。一度も使うことがないかもしれないもののためにお金を払うなんて、入っているはずがないと思った。けれど、「うちの家族って、保険入ってないよな。」

に対する母の答えは、「入ってるよ。」

だった。私はとても驚いた。聞くと、私や姉、祖母や母みんなが加入しているそうだ。

なぜ私たちがそんなものに入っているのか、たずねると、祖母が生命保険に助けられた経験があると話してくれた。

「おじいちゃんの背中に大きい傷があったこと、覚えてる?」

二年前に亡くなった祖父の背中には、大きな傷があった。あの傷は、昔祖父が肺病、今という肺炎という病気になったときの手術のあとだそうだ。今では多くの人が助かる病気だが、当時は薬が開発されただけで、亡くなる人も多かったと言う。幸い、祖父は手術や薬のおかげで助かった。しかし、大変だったのは、祖父が闘病中の生活だった。そのとき、祖父の家族は祖母、母、母の妹の四人で、働いているのは祖父だけだった。祖父は自営業だったため、入院中の収入はゼロになった。二人の娘もまだ小さく、入院費や手術費など、たくさんのお金がかかる。そこで助けられたのが、生命保険の存在だった。祖父が昔から入っていた生命保険によって、家族が生活することができたそうだ。

祖母が、祖父の入院中の日記を見せてくれた。そこには、「家族に迷惑をかけてしまった」など、家族への心配や感謝の思いが綴られていた。日記の中の祖父も、私の記憶の中にいる祖父のように、人のことを想いやれる、とても優しい人だったんだと思う。だからこそ、万が一のときの家族のことを想い、生命保険に加入していたのではないかと思った。

そんな経験から、私たち家族は生命保険に加入しているそうだ。はじめは、生命保険に否定的だった私も、その話を聞いて、生命保険に入っている親の気持ち理解できたような気がした。もしそのとき、祖父が生命保険に入っていなかったらと思うとぞっとするし、本当に入ってくれていてよかったと思った。もちろん、生命保険にお世話になるときが来ないことが一番良いことだけ

第60回中学生作文コンクール

ど、ずっと元気でいられるという保障はどこにもない。大切な人を想う気持ちが、生命保険に加入することに表れていると感じた。

将来、私は一人で暮らすとき、結婚するとき、子どもができたとき、どんなときでも、自分のため、家族や大切な人のために生命保険に加入しておきたいと思っている。生命保険に入るとたくさんのお金が必要なことは分かっている。けれど、自分の家族の負担を考えると、そのお金で安心を得ることができるなら、安いものだと思う。祖父や母の想いやりの気持ちを、私も受け継いでいきたい。